

2025 年 6 月 4 日（水）

『 自転車くれた景色と気づき 』

～100Km 先の自分に会いに行く～

湖山 浩行 会員

中学生の頃、僕はマウンテンバイクを「持っただけ」の男でした。レースや山に興味があったわけではなく、「なんかカッコよさそう」という軽い気持ちで買っただけ。でも、そんな僕の人生は、勘違いの幼なじみによって大きく動き出します。

ある日、「すごい大会見つけた！」と彼が言ってきました。内容は、山の中を 100km 走る MTB（マウンテンバイク）レース。もちろん、僕は何も知りませんでした。そして、気づいた時には勝手にエントリーされていて、自転車屋に連れて行かれ、勝手にグレードの高いマウンテンバイクを見せられ、気づいたら自腹で購入していました。

装備も経験もゼロのまま初出場した大会では、開始 1 時間で「帰りたい」と思い、60km 地点で足切り。ゴールは見れませんでした。

しかし、その悔しさがきっかけで、僕は毎日ペダルをこぎ続けました。体重を落とすために始めたのに、気づけば「足腰を鍛える人」になり、ご褒美のハイボールとポテサラに誘惑されながらも、何度も坂を登りました。

2 回目、3 回目…ようやく完走。「俺…山を越えたぞ…」と、あの時ハイエースの窓から見た景色を、自分の足で見ることができました。

そして、迎えた 4 回目の大会。気が緩んだのか、今度はホイールが大破。再び、あのハイエースに回収され、山道でお尻に衝撃を受けながら、「体力以外の経験値も増えたな」と痛感しました。

5 回目の大会。ホイールも壊れず、ハイエースにも乗らず、なんとか完走。息も絶え絶えの中、たまたま隣にいた見知らぬ参加者との会話がありました。

僕：「いや～、やっぱ運動不足はダメですね～」

相手：「運動不足の人は完走できないよ」

ハッとしました。ギリギリでも、自分はちゃんと走っていたんだと、その一言で気づかされました。



人より遅くても、自分のペースで進めばゴールできる
人生も自転車も、こぎ続けた人だけが景色を見られる
自分をナメるな、自分は思ったより走っている

四つのテストと照らして

真実かどうか

→ 自分の体力と正直に向き合い、できること・できないことを知る機会となった。

みんなに公平か

→ プロも初心者も同じ道を走る。ルールは全員に平等。過程にも価値がある。

好意と友情を深めるか

→ 見知らぬ参加者に励まされ、国籍も年齢も関係ない仲間意識が生まれた。

みんなのためになるかどうか

→ 苦勞を語ることで誰かのきっかけになれば、それは奉仕になる。

職業奉仕との接点

「自己責任で完走する」という姿勢は、仕事にも通じる

トラブル（ホイール破損）にも自分で向き合おうとする姿勢は、職業人としての矜持
苦しい経験を「他人のために語る」ことで、それが奉仕に変わる。